

Title	ドイツ語学最近の動向
Author(s)	塩谷, 饒
Citation	独逸文學研究 (1962), 10: 1-19
Issue Date	1962-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/186281">http://hdl.handle.net/2433/186281</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# ドイツ語學最近の動向

塩 谷 饒

- § 1 Grimm 以來の傳統
- § 2 共時論的研究の開拓
- § 3 Humboldt の再評價
- § 4 方言學の興隆と語史への寄與
- § 5 Deutscher Sprachatlas の現況
- § 6 Spracharchiv の持つ意義
- § 7 Atlas linguistique de l'Alsace
- § 8 結 語

§ 1. Jacob Grimm が *Deutsche Grammatik* (1819—1837) によって基礎を置いたドイツ語の學術的研究は、19世紀末から今世紀の始めにかけて E. Sievers (1850—1932), H. Paul (1846—1921), W. Braune (1850—1926), F. Kluge (1856—1926), O. Behaghel (1854—1936) 等の學者が輩出して相協力し、今日なお十分に利用される數多くの業績を擧げることによって一大飛躍を見たのであるが、それは始祖が示した軌道に沿っての發達であった。すなわちそれは印歐語比較言語學を背景とし、歴史的研究法にもとづくものである。そして Grimm が一方において印歐語比較言語學の創始者と言われる Franz Bopp (1791—1867) の刺戟を受けながらも、自らの廣範圍にわたる業績によって近代言語學そのものの樹立者の一つに数えられる榮譽を担うように、Sievers 以下の面々も „音韻法則に例外はない。言語變遷の要因として類推作用を重視すべきである“との主張を掲げる *Junggrammatiker* として、彼らの業績はすなわち當時の言語研究を輝かしくリードした。

Paul の著 „*Prinzipien der Sprachgeschichte*“ (1880<sup>1</sup>, 1920<sup>5</sup>) はこの學派の據る言語史研究方法の理論を詳細に展開したものとして影響は大きく、明治時代における我が國の國語學の先達もこれを翻譯して史的研究法を導入するほどであった。

しかるに *Junggrammatiker* の最後の巨匠とも言うべき *Behaghel* が1936年に世を去ってから四半世紀が経過し、ドイツ語學はさらに大きく轉回した。すなわち、彼らの據った歴史的研究に對立する共時論的方法にもとづく研究がようやく實を結ぼうとして來たこと、*Junggrammatiker* の間であまりとり上げられなかった *W. v. Humboldt* の言語觀が再認識されるに至ったこと、さらに方言學が發達し *Junggrammatiker* の主張を事實において幾つか修正したこと——この三つから目を轉じて現代のドイツ語學を論ずるわけには行かないと言える。

§ 2. ドイツにおける *Junggrammatiker* の活動の意義を十分認めながらも、その方法の一面性を強く主張したのはスイスの言語學者 *F. Saussure* (1857—1913) であった。彼の死後 „一般言語學講義“ (*Cours de linguistique générale*, 1916<sup>1</sup>) が發行され、言語の史的變遷を研究する通時言語學と、一定の場所、一定の時における言語を體系的に記述する共時言語學の區別が明かにされ、しかも後者の確實な基礎の上に前者が成立する主張が傳えられて以來、従來の歴史的研究の偏重に對する批判の聲が次第に大きくなり、記述言語學の急速な發達を促すに至った。*Saussure* の直接の影響は地元のスイスからフランスに認められたが、*N. Trubetzkoy* を祖とする *Prag* の機能音韻學派、*L. Hjelmslev* を頭とする *Kopenhagen* の構造言語學は何れもその流れくむものと言われている。

しかるにこのような傾向は近代言語學發生の地とも言うべきドイツではむかひに根を下ろすことはなかつた。眞の意味におけるドイツ語の共時論的研究は、まずオランダの英語學者 *E. Kruisinga* が „*Einführung in die deutsche Syntax*“ (1935) という好著を世に送ることによって先鞭がつけられたのである。彼は言語學が言語史の同義語として理解された時代は過ぎ去ったとの自覺から、現代ドイツ文の記述的研究を行った。そこでは文の性質、構造と共に格、時称、分詞、不定詞をはじめ各品詞の文中における機能が論ぜられ、最後に „*Wortschatz und Wortbildung*“ が扱われている。しかしどのような原理で

## ドイツ語學最近の動向

Syntax が記述されたかについては問題とされることがなかった。

この点はようやく1950年代になって Regula, Glinz, Boost, Erben 等ドイツ語を母語とする學者によって次々ととりあげられるに至ったところである。彼らの中心問題はドイツ文と、それが扱われるべき Syntax であり、従来の古典文法に由来する考えを離れてドイツ語そのものの構造に即した體系の樹立を志そうとするのだが、それにはまず客観的な外的形式を手がかりとして意味に向かうという努力を試みる点で一致している。これに関しては千石喬氏が Erben と Glinz の所説をドイツ文學16<sup>冊</sup>, 27號でそれぞれ適切に紹介批評しているから、ここで繰返す必要はないと思う。ただ同氏が未だ論じなかった Erben の „Abriß der deutschen Grammatik“ (1958<sup>1</sup>, 1959<sup>2</sup>) の意義について一言して置きたい。というのはこの著作は今や實用的價值が十分認められて広い讀者層を見出しつつある Schulz-Griesbach の新しい文法書 (Grammatik der deutschen Sprache, 1960) にも若干の暗示が認められるからでもあるが、さらにドイツ文法の全體を共時論的に扱った最初のものだからである。Erben は先に „Grundzüge einer Syntax der Sprache Luthers, 1954<sup>1</sup>“ において従來文の構造と品詞の機能が漠然と扱われた Syntax を formale Struktur と funktionale Struktur の二面から考察し、前者では Redeeinheit たる文の構造を、後者では Redeteil たる Wort が Rede(einheit) の中で示す機能を扱い、記述を有機的に行つたと述べた。今度の新著の試みはさらに大きく、従來文法と言え、 „Laut-, Formen-, Satz- und Wortbildungslehre“ と分れていた傳統的な扱いを廢し、言語を構成する二大要素としての Wort と Satz を形式と機能の二面から考察することによって、矛盾なく文法の體系を記述しようと試みたのである。もとより Wort の機能といえば Satz の中における働きであるから、二つの要素は有機的に記述されるとする。彼がここに Grundeinheit として掲げた Wort と Satz そのものの検討については問題が残っているであろう。また Wort の構造を述べるに當り、ドイツの學者がとかく等閑視して來たアメリカ人の業績を参照している努力は注目に値する

### ドイツ語學最近の動向

が、音素そのものの定立は吟味にかけるところがあり、<sup>1)</sup> 依然としてこの方面におけるドイツ學界の不毛を反映していることは否定できない。それにしても、現代ドイツ共通語を伝統的な文法上の術語に縛られることなく、全面的に記述する試みをあえて行ったこの著作は、今後ドイツ語が印欧語比較言語學の背景を離れて——否、他のゲルマン諸語との比較すら顧慮することなく——単一の研究對象として取上げ得ることを明白に示したものとして十分評價さるべきものである。

§ 3. 次に實証的な研究の立場からひたすら材料の集拾整理を重んじた Junggrammatiker の方法にあき足らず、言語を人間精神の形成力と観て、その相違を世界像の差に歸せしめた W. v. Humboldt の思想に據り、母語の働きと歴史を考察しようとする學者が1930年代からその業績をあげたことが注目される。これについても福本喜之助氏が言語研究19・20号(1951)に„ドイツ語史より観た「言語の世界像」と「語野の問題」“と題して第二次大戦後相づついで発表された Leo Weisgerber の大著 „Von den Kräften der deutschen Sprache“ (Bd. 4, 1949—1950) と、1930年代に Trier が das sprachliche Feld について述べた諸論文を詳しく紹介し、さらに „ドイツ語學の方法論に現われた静的言語觀と動的言語觀“ という論文で (関西大學論集, 1955) 再びとり擧げる等、色々な機會で発表されているので新に論ずることは止める。ただ Weisgerber の學説が W. Porzig などと共にすでに1930年代にならぬうち一般言語學の研究者からローマン主義的と呼ばれながら<sup>2)</sup> 一方では共時論的の顧慮において Saussure の影響を受けたとも目されること<sup>3)</sup>、また語野の概念を導入して語彙の使用に異る時代の世界像の反映を証拠だてようとした Trier が史的 (通時論的) 研究と共時論的研究を結合したと評せられることを指摘しておきたい。<sup>4)</sup>

そもそもドイツにおいては言語の記述的研究について示唆したのは Humboldt をもって祖とすると見る傾向があるので、新しい共時論的立場から研究する學者もしばしば Humboldt の言を引用したり、ローマン派の人が使い出

し Humboldt によって明確な概念を與えられた *Innere Form* といった語を使用する。そこで現代の言語觀は *Junggrammatiker* の時代と異り全體としてローマン派の *Idee*, 別して Humboldt のそれに歸つたと評せられるのである。<sup>5)</sup>

§ 4. ドイツ方言の研究が眞に學術的な確實さを以て始められたのは Andreas Schmeller (1785—1852) の功績である。彼は主著 „Die Mundarten Bayerns“ (1821) においてはじめて正確な音聲表記を行い開母音の區別をはじめ、母音の鼻音化記号 (˜), 弱音の e を ə で表わすことを導入した。Jacob Grimm の *Deutsche Grammatik* が書かれた言語を基礎とし „Lehre von den Buchstaben“ を以て始まつ時、Schmeller がすでに文字と音聲の俊別を行なつたことは特筆に値するであろう。そして1870年代に至り、デンマークの Karl Verner が Grimm の法則の例外といわれた音の現象を解明し、J. Schmidt が *Wellentheorie* (波紋説) を發表して印欧語分裂に関する Schleicher の系樹説を揺がし、さらに Sievers が „*Lautphysiologie*“ を以て言語音の基礎的研究を公表して、ここに „音韻法則“ を金料玉條とする *Junggrammatiker* の活躍が學界を大きくリードした時、方言研究も Georg Wenker (1856—1911) によって一段と進歩を見たのであった。すなわち、*Junggrammatiker* の驍將達は現代語に認められる法則を以て過去の現象を説明するために、何れも生きた言語の考察に關心は持ったが、その資料はとかく文語(それも文學作品)を重視する傾向があった。Behaghel のごとき學者は方言についての理解が深く、文語と方言といった問題をしばしば扱っているが、自らが方言そのものの研究者であつたとは言えないであろう。ところで Marburg 大学の圖書館司書であつた G. Wenker はドイツ方言の全貌を捉えた地圖 (*Deutscher Sprachatlas*) を作る計畫を立て、1876年以來文章40を含む質問状を各地の學校所在地に送り、その數は実に40000に及んだ。これが有名な *Wenkersätze* であるが、質問状に記載された標準文語を局地の方言に翻譯したのは主として學校の教師であつた。1876年に Wenker はまず Rheinland

#### ドイツ語學最近の動向

からとりかかり、しかも „音韻法則には例外がない“ という Junggrammatiker の主張を方言分布の中で確認しようと試みたのであったが、その主張に立って想像された方言の境界線は事實に於てその通り走ることなく、しばしば交錯し „例外なし“ との主張が破られる結果となり、一部の識者の注意を惹くこととなった。後にルクセンブルクの John Meier が同地の方言を Wenkersätze によって調査し、Wenker の後継者 Fer. Wrede (1863—1934) はオーストリア・スイスへと手を擴げさらに 9000 に及ぶ質問状が發せられた。Wrede は大學教授としての地位を保ち Deutscher Sprachatlas の名を冠する研究所の仕事としてこれを行なった。Wrede の後継者 W. Mitzka とその協力者 B. Martin はさらにこの仕事を受継ぎ、Wenker 以來 53000 に及ぶ學校所在地に質問状が發せられることとなったが、これはドイツ語地域の 100 % に當る數である。Wrede は自ら優れた方言學者として業績をあげる一方、その知識を古代の言語研究へと移し、ドイツ語の生成・ゲルマン語の分類についての新説 („Ingwäonisch und Deutsch“ 1924) を發表し、あるいは強い反對を蒙り、あるいは賛意を表せられ廣く Germanist の間に顧みられる存在となった。彼の後継者 Mitzka は地味に多くの Monographie を年々發表したが、Wenker の音を中心とした Atlas に加えて、1938 年に語彙の Atlas 作成を計畫し (Wortatlas)、さらに Siedlung の歴史をも探究する等、方言學の分野をきわめて廣く開拓した。

この間に手固く Rhein 地方の方言研究を出發點とした Th. Frings は、續いてオランダ・フラマン語の方言へと視野をのぼして行ったが、やがてその成果を文化史に應用し、Aubin および Joseph Müller と共に企畫した „Kulturströmungen und Kulturprovinzen in den Rheinlanden“ (1926) 中の „Sprache“ という項目で發表した。この頃から Frings はひとえに方言のみならず、ドイツ語學中のあらゆる問題に興味を示し、自らの研究を進めると共に精力的に他の業績を顧みて書評を行なった。Leipzig 大學に籍をもつてからは中部地方の植民史とその言語の探究を Seminar の主な仕事とし、

## ドイツ語學最近の動向

L. E. Schmitt 等の協力者を得て次々に業績が現われるようになった。これらはやがて近代共通語成立の過程を解明する基礎的な論文へと連なる重要な研究である。

Behaghel が長い精進の學究生活に終止符を打って世を去り、また該博な知識と根氣をうたわれた文献學者 Konrad Burdach (1859—1936) が生涯を閉じた1936年は、たしかに Germanistik の世界において新舊の時代を畫した記念すべき年であったと言えよう。なぜならこの年に Frings, Schmitt, Schwarz 等方言學の畑から名告り出た學者が續いて發表した論文がドイツ共通文語の起源を扱って居り、従來の定説を覆す結果となったからである。

ドイツ共通文語の淵源を述べるにあたって語史は必ずその Begründer と言われる Luther の言を引用している。„私はドイツ領内のある獨特な言語を用いるのではなく、高地の人々も低地の人々も共に理解しうようもっとも共通した言語を語る。私はザクセン (Sachsen) の官廳に従って語る。それにはドイツの凡ゆる王侯が従う…だからこれは共通ドイツ語だ…(Tischreden Kap. 70)“ 彼はさらにこの言語は皇帝官廳の言語とはほひとしいことを述べている。そこで従來はドイツ共通文語の源を官廳語の發達に求め、その方面から Sachsen 官廳語が共通語と言われるゆえんを明かにしようとした。すなわち、13世紀の終り頃からドイツ語が公文書において使用される度数が増えたが、もはや宮廷文學の時代は Hohenstaufen 家の没落とともに去り、文學作品は地方的なものとなりはてた後においては皇帝官廳から發せられる公文書のみがドイツの各地方にわたって理解される唯一の言語として統一的な形成を備えて行く可能性があり、當然諸侯の官廳語に影響を與えるものとなり得たという意見にもとづくのである。Burdach は14世紀に皇帝が Luxemburg 家より出て Prag に居住するに至って現實されたことを力説した。彼は中世より宗教改革に至る時代の文献學的研究を精力的に行い、皇帝 Karl 四世 (1316—1378) がいかに Humanismus の洗禮を受け、官廳の組織をよく整備すると共にその言語に心を配ったことを認めた。そもそも Prag は Oberdeutsch と



Mitteldeutsch の接する地點であったため、彼の官廳は上部ドイツ語の單長母音をとり入れた公文書を發したが、それは今日の共通語の母音組織と近いものであり、Prag には Karl 四世以來およそ百年間官廳があったので、Böhmen に接してその管下にあった Mähren, Schlesien の官廳はもとより終には Sachsen 選舉侯の官廳に多大な影響を及ぼした——これが要するに 1880年代から Burdach によって唱導され 1930年代の中頃までは(従って Junggrammatiker に)承認されていた定説である。しかるに 1936年には Frings は „Die Grundlagen des Meißnischen Deutsch. Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte der deutschen Hochsprache“ という小論に數年の成果を結晶させ、L. E. Schmitt は „Zur Entstehung und Erforschung der neuhochdeutschen Schriftsprache“ を Zeitschrift für Mundartforschung に發表し、Schwarz もまた同誌に „Die Grundlagen der neuhochdeutschen Schriftsprache“ を投稿し、Sachsen をはじめとする中東ドイツ諸官廳語の特色は Prag からの影響によるものではなく、實にこの地域一帯にわたって語られた共通語の反映であることを明かにしたのであった。

Elbe 河、Saale 河の東方は中世にドイツ人が植民を行った新開地で後の Sachsen, Meissen 等の領邦が中心となっているが、この土地には古いドイツ領 (Mitteldeutsch, Oberdeutsch) からの移住者が集って次第に平均化した言語を作りあげ、13世紀以來文語としても統一を示し出した。しかもそれ以前に互いの交通の具として話し言葉に使用していた。そこでつくりあげた共通語の母音組織は今日の文語のそれと通じている。Meißen-Sachsen, Lausitz, Schlesien, Mähren, さらに Prag のある Böhmen の諸地域の官廳語が音韻や語彙を共通にしているのは中東部ドイツ地域の共通の歴史を、すなわち植民地化の中から生じた共通語を反映しているからに他ならず、Luther が Sachsen 官廳語に従って語るといったのは、そこに記された音韻文法に従って書くという意味に解釋すべきである。

これが彼らの所説の結論である。„新しい共通語は宗教改革同様、傳統のな

## ドイツ語學最近の動向

い植民地にのみ生じ得たものであり、新しいドイツの土壤に生い繁ったものである<sup>6)</sup>“ と言う Frings の広い文化史的視野もさることながら、諸官廳の公文書を一々吟味した Schmitt の根氣、Prag の大學に居りながらその官廳語の影響力の限界を認めた Schwarz の判斷力は相働いてここに語史の記述を大きく變えることになったのである。これがいかに注目すべき業績であったかは、同じく方言學を専門とした A. Bach が1938年に著したドイツ語史の初版ですでにその説を適切に紹介していることでも分る。

Frings と Schmitt はさらに1944年に „Der Weg zur deutschen Hochsprache“ という論文（一般原理について Frings が、具體的な例證を Schmitt が記した）を表わし、この問題について従來の説に據る者の口をいよいよ封ずることとなった。このようにして彼らはよく方言研究を Germanistik の主要な課題とし、自らその分野において業績を挙げ得ない者もおよそ彼らの仕事の成果を顧みずしてドイツ語學の問題を全面的に論ずることは不可能だとの自覺を持つようにした点でその功績はまことに大である。

§ 5. 現在ドイツでは全ドイツ語地域の方言を一斉に調査する國語研究所といった設備は存在せず、やはり Marburg 大學の Institut für deutsche Sprache という兼稱のある Deutscher Sprachatlas において求心的な方言調査が行なわれている。

これは一方において大學の Germanisches Seminar と密接な關係を持ち、Seminar の Direktor の一人である L. E. Schmitt が所長として主宰している。長年 Leipzig 大學にあって Frings を補佐していた L. E. Schmitt は1957年以來 Mitzka の後を襲って Sprachatlas の所長となった。Mitzka とその協力者 Martin も今なお時に應じて仕事を行なっているが、同所専任の Dozent として v. Polenz が居り、數人の助手が所員として勤務している。Schmitt 教授はドイツ語學、文献學、Mittelhochdeutsch 等の講義演習を、Polenz 講師はゴート語、Althochdeutsch、方言學概説等の講義演習を Germanisches Seminar で行なっているが、彼らの選衡を経た古參學生が

Sprachatlas の内部で研究を行ない、Schmitt 教授の演習あるいはコロキウムには Polenz 講師以下所員の面々も参加して自由に発言している。Sprachatlas における主な活動は、前からの継続の仕事として Deutscher Sprachatlas と Deutscher Wortatlas が挙げられる。

① Deutscher Sprachatlas, Laut- und Formenatlas

Wenker は質問状による調査の結果を地図に記しはじめたが、その公刊が行なわれたのは後継者の Wrede の時代になってからのことである。

Wrede, Mitzka, Martin は 1926—1956年の間に 128枚の地図を23分冊にまとめて発表した。

それによってたとえば (Mhd.) iu (Nhd.) eu がどのような分布をしているかといったことは一枚の地図で表わされるわけになり、音韻、形態の重要な特色が全面的に把握されることになった。しかしこの仕事はまだ完成に時を要するもので、専門の方言學者と製図家が数人協力してなお三代はかかり、印刷費は現在の金額で 200 万マルク、発行全體にかかる経費は 6—700 万マルクになると見積られている。1926—1956の公刊では色彩によって示されたもとの地図を黒白に還元しなければならなかったのであるが、Schmitt 所長は 1961年度内に色彩の複寫を始め得る見通しがついたと報じている。<sup>7)</sup>

② Deutscher Wortatlas

Wenker によってはじめられた Deutscher Sprachatlas はまず音韻の地理的分布を示すものであったが、Deutscher Wortatlas は Mitzka が Martin とともに語彙の分布を調査するために企畫したものである。Mitzka は Ahorn, Ameise, Anemone…といった具合に abc 順に並べた 200語を選んで質問状を作成し、そのリストを Zeitschrift für Mundartforschung (Jg. 15, 1938) に発表した。1939年の 1月からはば 50000の學校所在地に送られ、Sprachatlas 同様大抵は教師が答えた。

1949年までに 32の地図が描かれたので、1951年に第 1 巻が Gießen で印刷された。1961年 3月までに 10巻が印刷された。11—14巻の準備もできている

## ドイツ語學最近の動向

が、印刷費の都合がつかないと言われている。

平生 *Deutscher Sprachatlas* においては研究所員や古参學生が一つの單語をテーマにもち、その方言地図を作成しながら、共時論的・通時論的研究を行っている。その中には女子學生も比較的多く見出され、外國人留學生も可成りいる。インド、ブラジル等遠い所から來たものは主として方法を學ぶことを目的としているようであるが、米國、英國、カナダをはじめ北歐、オランダ等のゲルマン語地域から來たものは、ドイツ人と對等に仕事を行い成果については Schmitt 教授の演習で発表が行われている。それらの研究の中で優秀なものはすでに „*Gießner Beiträge zur deutschen Philologie*“, や „*Deutsche Wortforschung in europäischen Bezügen*“ の中にとり入れられた。前者は Otto Behaghel が創始し、Götze, K. Viëtor, Mitzka を經、L. E. Schmitt が刊行者となったものですでに 130 に及ぶ巻が發行されている。後者は *Untersuchungen zum Deutschen Wortatlas* という副題を持ち、やはり Schmitt が刊行者である。第 1 巻は 55 の地図を含む 678 ページの大冊が 1958 年に Mitzka の 70 才を祝う *Festgabe* として發行された。第 2 巻も今年の 3 月に印刷中と言われていたから、あるいはすでにもう刊行されたかも知れない。そこには L. E. Schmitt 教授をはじめ、L. Berthold, B. Martin 兩教授、Polenz 講師といった *Sprachatlas* の錚々たる幹部が名を連ねている。

L. E. Schmitt: *Deutscher Wortatlas und deutsche Wortforschung*,

L. Berthold: *Schwierige Wortdeutungen im Mundartwörterbuch* と  
いった原理的なテーマに續いて具體的な研究が収録されている。

B. Martin: *Die Namengebung aus Amerika eingeführter Kulturpflanzen*.

P. v. Polenz: *Slavische Lehnwörter im Thüringisch-Obersächsischen, nach dem Material des Deutschen Sprachatlas*.

*Wortforschung* の成果の一部は 1960 年にさらに „*Hessische Blätter für Volkskunde*“ に収録された。これは B. Martin と G. Heilfurth の監修に

なるものであるが、51・52巻が *Festschrift für B. Martin* として編集された。そこには次のような論文が掲載されている。

R. Freudenberg: *Ortscheit und Waage. Zur Sachgeschichte des Zugholzes an Wagen und Pflug.*

D. Měhn: *Mitteldeutsch-niederdeutsche Sprach- und Kulturzusammenhänge in Wittgenstein.*

P. v. Polenz: *Mundart, Umgangssprache und Hochsprache am Beispiel der mehrsichtigen Wortkarten „voriges Jahr.“*

その他に *Sprachatlas* が繼續事業としてとりあげているものが二つある。それを ③ *Regionalanstalten*, ④ *Deutsche Dialektgeographie* と稱している。

③ *Regionalanstalten*: ドイツ領以外のドイツ語地域地図作成についても *Sprachatlas* が音頭をとったり、原地の協力を得ている。

a) *Siebenbürgisch-deutscher Sprachatlas*

ルーマニア領内のドイツ語地域についての方言研究であって、L. E. Schmitt はオーストリアの *Innsbruck* 大學教授 Klein と協同し、特に *Siebenbürgisch* の出である Dr. Rein の懸命な協力に負う所が大きい。その成果として、*Laut- und Formenatlas* が *Siebenbürgisch-deutscher Sprachatlas* の第1巻第1部に收められ、1960年9月に印刷に付された。

Mitzka の *Wortatlas* に関する質問状は、この方言の85%に發せられたが、残りについて完全を期する計畫が立てられ、第2巻に収録される予定である。第3巻は1・2巻の註ともなるので、Klein 教授の *Siedlungsgeschichte* も載せられると言う。

b) *Tirolischer Sprachatlas*

*Tirol* の方言地図作成については Bruno Schweizer が南 *Tirol* の一部に關する資料を集めたに過ぎないので、北 *Tirol* 全域に質問状が發せられた。また Bruno Schweizer が手をつけた所でも修正する必要が認められ、1960年

9月にさしあたって470箇所から材料を求める計畫が練られた。

c) Luxemburgischer Sprachatlas

Robert Bruch が多年にわたって調査した成果の印刷については1960年度に Schmitt と H. Moser が Bruch 夫人及びルクセンブルクの文部省と協議した結果、同國の文部大臣が費用の支出を承諾したので實現する見透しがついて來た。地図は 180 枚あるので60枚つつ3巻に分けられる予定である。

d) Schlesischer Sprachatlas e) Nordostdeutscher Sprachatlas

1937年にはドイツ領であった地域の方言地図が10万分の1の大ききで計畫され、前者については390、後者は250の素描が試みられた。これらは „Laut- und Formenatlas“ の下仕事である。後者は最初 „Preußischer Sprachatlas“ という名で企畫されたものであるが、さらに Oder 河までの西の区域も含まれることとなった。

④ Deutsche Dialektgeographie

個々の方言研究の Monographie は B. Martin 監修の „Deutsche Dialektgeographie“ シリーズの單行本として公刊され、1961年3月までに65巻でている。この中には Sprachatlas の新進研究員の業績がかなり見出され、Hessen 諸地域の方言が多く扱われているが、最近東獨から轉入した Bellmann 助手の „Mundart und Umgangssprache in der Oberlausitz, sprachgeographische und sprachgeschichtliche Untersuchungen zwischen Schwarzwasser und Lausitzer Neiße (Bd. 62)“ といった貴重な仕事も認められる。1960年3月現在印刷準備中と伝えられるものの中には Lessiak, Kranzmayer, Schwarz 等の大物が名前を連ねている。

Bd. 58 E. Kranzmayer: Laut- und Flexionslehre der zimbrischen Mundart.

Bd. 61 P. Lessiak: Die Mundart von Pernegg in Kärnten.

Bd 64 E. Schwarz: Sudetendeutsche Sprachräume, neubearbeitete 2. Aufl.

方言研究の雑誌 „Zeitschrift für Mundartforschung“ は長い間 Mitzka が監修していたが現在は Schmitt に受継がれ、1960年3月を以て27巻が終了した。28巻以後については „Forschungsgemeinschaft“ の援助によりページを増す見込みが生じたが、投稿された研究の數多くがまだまだ掲載の運びに至らない状態である。

以上の繼續事業の他 Sprachatlas で力を入れている研究に Namenforschung がある。それはある地域における Personennamen, Raumnamen の共時論的・歴史的研究で Polenz が中心となっている。同氏は Germanisch-deutsche Landschafts- und Bezirksnamen im Gebiet des Karolingerreiches vom 7.—11. Jahrhundert, sprachlich untersucht. という大作をものにしたほか、E. Schwarz の Festschrift (1960) において Vorfränkische und fränkische Namensschichten in der Landschafts- und Bezirksbenennung Ostfrankens 等數多くの注目すべき業績をあげている。また Debus 助手も生粋の Hessen 人として方言研究の Monographie を多く發表しているが、Namenforschung の領域においても Sprachwissenschaftlich-siedlungsgeschichtliche Untersuchungen der Ortsnamen Niederhessens といったテーマと數年來とりくんでいる。

Sprachatlas は年々 30~40 人の外國學者がこれを訪れて利用しているが、Schmitt が所長となってから盛に外國人學者を招いては講演を依頼し、あるいは彼らを囲んでのコロキウムを開いている。たとえば1958年から59年にかけて次のような一流の學者が講演を行なっている。

ポーランドの L. Zabrocki 教授 (Posen) が „音韻論と方言學“ について、同じくポーランドの Urbancik 教授 (Krakau) は „ポーランドの方言研究と der polnische Sprachatlas“ について述べ、オーストリアの Kranzmayer 教授 (Wien) は „中央および東部アルプス境界地域における言語混淆“ というテーマで講演し、スイスの Hotzenkötcherle 教授 (Zürich) は „Zur Raumstruktur des Schweizerdeutschen“ と題し、さらにカナダの Peters 教授

(Winnipeg) が „カナダの植民化と言語状態“ を論じた。このあたりに Schmitt 所長の Orgnisator としての腕が見られるわけであるが、同氏は „言語境界線と二言語使用の問題“ を数年來の研究テーマとしているので、オーストリア、スイス、フランス、オランダの方言學者ととくに連絡を密にし、自ら所員を引率して問題の諸地域を視察している。すなわち、1958年には北イタリアの Triol, '59年にはスイス、'60年にはフランスのアルサス・ロレーヌ地方、'61年にはルクセンブルクからベルギーが対象となり、大きく Germanisch-romanisch の言語境界線を探ろうとした。またカナダの Peters 教授と連絡し、カナダ人 Menoniten 留學生の協力を得て、低獨方言出身のカナダ Menoniten を調査している。

オランダ方言の關心についても Frings におとらず深く、自らそれに通曉するばかりでなく、Niederländisches Seminar の所長を兼任してオランダ人講師學生をよく受入れている。Heeroma 教授をはじめとする方言學者と連絡をよくとり、オランダで出版された著作・雑誌・論文の整備に怠りがない。

F. Wrede が Sprachatlas の所長であった時にはじめられた仕事の一つに „Hessen-nassauisches Volkswörterbuch“ がある。面積の小さい Wetzlar の中にも „Löwenzahn“ を表わす30以上の名稱があるといわれる Hessen, Nassau の地域の語彙を集めて整理することは非常に時間がかかるのであったが、1916年以來 Luise Berthold が Wrede の協力者となり、1927年から分冊が公刊された。Wrede の死後(1934年)彼女が指揮をとり、最初の出版から30年以上を経た1958年までに „Schub“ の頃が完成した。Berthold はこの仕事により教授の称号を與えられたが、本年(1961年)1月70才の生涯を閉じた。

Deutscher Sprachatlas はながらく戦中戦後の資料整理に忙殺され、また仕事を繼續する場所の狭いことをかこっていたが、1960年の11月新建築の広い場所が與えられ、今後ますます方言研究の中心として發展して行くことが期待される。



なお方言の録音については、Mitzkaが關心を持つ Ostdeutsche Mundarten (舊ドイツ領) のそれが注目すべきであろう。

§ 6. Sprachatlas の活動がまず質問状による間接的な方法によって始められ、録音はそれに附隨して行なわれたのであったが、Phonometrie の提唱によって音聲研究に新生面を開拓した E. Zwirner は 1933 年以來ドイツ諸方言の録音にとり組み、その成果を色々の音聲研究雑誌に發表している。たとえば

1933: Schallplattenaufnahmen deutscher Mundarten (Vox 19: s.19-20)

1937: Textliste märkischer Mundart (Phonometrische Forschungen Bd. 2)

1937: Textliste schlesischer Mundart (ibd. Bd. 3)

1937: Textliste neuhochdeutscher Vorlesesprache bayrischer Färbung (ibd. Bd. 5)

1956: Lautdenkmal der deutschen Sprache (Zeitschrift für Phonetik 9: s. 1-13) と言ったように。

Zwirner は 1955 年以來西ドイツ連邦共和國の方言について組織的に録音する計畫を立て、1959 年までの間に 941 の場所から 4862 人の話し手を選び各々 10 分間の發話をテープに記録することを指導した。その際原則として各々の土地に定住したもから二世代の人、また東よりの避難民についても三世代の話し手を選択した。その録音にもとづき、音聲記號および文字によるテキストを作成し、これに標準語譯を附する計畫が行なわれ、次々に公刊されている。Zwirner の仕事は Spracharchiv と稱えられるものであるが、方言の現状、推移、混淆の状態にいろいろの資料を與えるものとして注目される。ことに彼は Phonometrie の立場からこの材料を利用し、41 のテープ記録の中に現われた 17000 以上の母音について音韻論的長短に關する實測の平均値を求めた結果、従來の方言學ではいささかも觸れることのなかった事實を明かにした。<sup>8)</sup>

すなわち、長母音と單母音の長さの比率について等高線が地圖の上に記録され、東部と東南部では比率が低く (1.3 からさらに下)、北西に向っては次第に

高く(Bremen を通る線は 2.0 となる), その際 Main, Rhein にそって楔形が北と南西の地域の間に突き出ていることが認められ, 母音分布の共時論的研究に新しい光を投げるに至った。ドイツにおける方言學の研究は Sprachatlas と Spracharchiv の完全な協力によって飛躍的な進歩をとげることが豫想されるのであるが, 目下のところその歩調はそろっていないうらみがある。

§ 7. フランス領において百数十万のドイツ語系住民を数えるアルサス・ロレーヌの方言調査については, 現在彼らの子弟が公用語としてフランス語で教育を受け, 全體としてフランス國民としての意識が強いため, 本格的な研究がフランス學者によって行なわれている。

すなわち同國の Germanistik の泰斗 Jean Fourquet は20年この方音韻論の業績をアルサス方言研究に應用しているが,<sup>9)</sup> 180箇所における方言の記述を開始しほぼ完成した。これは調査員が方言を語る者に直接質問する方法(direkte Methode)によって行なわれたが, アルサス出身の E. Beyer 講師(Strasbourg 大學)が主力となり<sup>10)</sup>, 音韻論的な解釋を整理する前に正確な音聲學的記述をという J. Martinet のすすめに従った。一方言についてできるだけ多くの語彙を集録し, 辭書の編集にも役立ちうようにした。この仕事は Sprachatlas のように „Atlas linguistique de l'Alsace“ と稱えられるものである。信頼できる音聲學的記述の音韻論的解釋は, Blaesheim の方言の語彙を徹底的に集録した Fräulein M. Philipp によって手がつけられた。彼女は共時論的記述と共に歴史的な説明を行って居り, Beyer と共に Fourquet の善き弟子として働いている。Direkte Methode の驅使と音韻論の顧慮において, フランスの學者はことアルサスに關してはドイツ方言學をしてその業績を参照せざるを得ない立場においたものと言うべく, フランスの Germanistik の強味を示している。ロレーヌ地方の方言研究はアルサスに比して立ち後れた感があったが, これもまた Fourquet-Beyer の線で探究の第一歩が踏み出された。

§ 8. 以上の叙述からドイツ語學の分野がいつまでも Junggrammatiker

## ドイツ語學最近の動向

の示した軌道を進んでいるものではないことが明かにされたと思う。方言學の語史への應用は遠く古代ゲルマン語へと及び、ゲルマン諸語の分類と、ドイツ語生成の問題については *Junggrammatiker* の想像を絶した新説が提出されたことも見逃せない。われわれ日本人が方言研究で特殊な業績をあげると主張するわけには行かないが、ドイツ方言學の業績と動向をわきまえることなしにドイツ語學を論ずることは不可能であることは強く指摘するに値しよう。*Frings, Mitzka, Schmitt, Schwarz, Mauer, Bach, Moser* 等々 *Germanist* の驍將達はいずれも方言に確實な學問的對象を見出した人々であって言語の歴史から、さらには言語研究一般について強い關心と深い理解を示し<sup>1)</sup>、著作・論文・書評に健筆を揮い、叢書や雑誌の監修者となっている等の事實も、十分見きわめる必要がある。彼らはまた自らの業績によって克服した *Junggrammatiker* の仕事（特に資料の集蒐）を十分評価し、ドイツ語學界の傳統に沿って *Text* の校訂をも行なっている。

古代・中世の言語研究そのものも *G. Eis* や *F. Tschirch* をはじめとする學者がよい仕事を發表しているが、全體として見ると *Frühneuhochdeutsch* が依然として大きな *Lücke* となっていることは否定すべくもないようである。<sup>2)</sup>

## 註

1) *Erben* は上掲書の S. 2 において母音音素として 18 をあげているが、それは *Hochsprache* における弱音の [ə] を除いた母音の音声学的分類に過ぎない。それも重母音については徹底を缺き、[ae] [ao] と一方において第二音素に特別な記號を附けながら、他方 [oy] と表記する等の矛盾が見られる。

また單純母音について見ると *Jones* 式の簡略表記が採用され、狭い母音については長短で異なる記號を使わず *i, i, y, y, u, u* と表わし、いささか音韻的な表記を行っている。

2) 泉井久之助：言語哲學（京都帝國大學新聞，1928）

3) 小林英夫譯：ソシュール言語學原論（1940）中の譯者の序 S. 6.

4) *F. Strobel*: *Handbuch der germanischen Philologie* (1952), *Wortfeldforschung*

S. 302

- 5) F. Maurer が Behaghel の „Die deutsche Sprache“ を1954年に改訂補註した序文で述べた言である。
- 6) Th. Frings. Grundlegung einer Geschichte der deutschen Sprache (1956<sup>3</sup>) II Aufbau und Gliederung des deutschen Sprachgebietes S. 42.
- 7) L. E. Schmitt: Deutscher Sprachatlas, Wissenschaftlicher Jahresbericht (1. April 1960—31. März 1961, S. 5)
- 8) E. Zwirner: Phonometrische Isophonen der Quantität der deutschen Mundarten (Phonetica Supplementum ad Vol. 4, 1959 S. 93—123)
- 9) J. Fourquet: Phonologie und Dialektforschung am Elsässischen (Phonetica Supplementum ad. Vol. 4, 1959 S. 85—92)
- 10) 1960年10月 Deutscher Sprachatlas の所員及び學生は Schmitt 教授に引率されてアルサス・ロレーヌの二言語使用の状態を詳さに視察したが、フランス側の受入れ態勢は頗るよく、J. Fourquet もパリから駆けつけて一行を迎え、Beyer は終始行を共にし、途中で得意の „direkte Methode“ による方言採集を何回となく行った。Fraulein Philipp も一部を共にし、オランダからは Heeroma, Fokkema 教授が合し、ここに Germanisch-romanische Sprachgrenze の問題をめぐって國際的な共同調査・討議が行なわれるさまを何回となく見たが、日本のドイツ語學徒はドイツ語の運用において一層の精進をすることと學問的視野を擴大することが緊急の要と痛感した。
- 11) たとえば Frings は Behaghel の „Deutsche Sytax“ について詳しい書評を行なった人であるが、1935年に出た Kruisinga の „Einführung in die deutsche Sytax“ についても一早く論評しており、共時論的研究のに対する理解を示して居る。そして Erben をはじめとする記述的態度をとる學者らからもしばしば歎辭を受けている。
- 11) Frühneuhochdeutsch について見ると、Virgil の文法はついに序章で終って居り、G. Eis は Götze のいわば諸家撰ともいふべき „Frühneuhochdeutsches Lesebuch“ に對し „Frühneuhochdeutsche Bibelübersetzungen“ を公表しているが、Erben も指摘するようにこの時代の文法書と辭書の編纂がまず企てられねばならない。(J. Erben: Grundzüge einer Sytax der Sprache Luthers, 1954 S. 167) その Erben も Luther-Syntax の発表以後は Luther, Frühneuhochdeutsch の研究をすすめるよりは、ドイツ文法の共時論的探究へと關心を向けているように思われる。